



〈参考資料〉地域歴史遺産とまちづくり(第5回「まちづくり地域歴史遺産活用講座」試行プログラム(2011.9.18-19実施)テキスト)

奥村, 弘

(Citation)

地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学 : 地域歴史遺産の保全・活用と防災, 平成23年度特別研究プロジェクト 国公立大学フォーラム:56-59

(Issue Date)

2011-12-11

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003729>



「まちづくり地域歴史遺産活用講座」試行プログラム

地域歴史遺産とまちづくり

神戸大学大学院人文学研究科教授

奥村 弘

はじめに

- 地域社会の危機の進行
- 地域歴史遺産（地域文化遺産）という考え方の広まり
- 阪神淡路大震災時の歴史資料保全活動
「分限」をこえた活動とそこから見えたもの
歴史資料ネットワーク（「史料ネット」）

・神戸大学人文学研究科地域連携センター（2001.10～）

1 地域社会の危機と歴史文化

- 2004年の大水害による県下の被災状況から 地域の歴史文化の解体の危機の拡大高齢化、コミュニティの解体による記憶継承力の低下

1886年

2009年

養父郡 39, 206人 → 養父市 28, 306人
多紀郡 46, 017人 → 篠山市 45, 352人
氷上郡 70, 934人 → 丹波市 70, 810
灘区 阪神・淡路大震災後 人口半数変化

2 地域歴史遺産という考え方の広がり

- 文化遺産は法律で規定されている文化財だけでなく、広い意味で歴史的な景観やまちなみ等空間的なものを含めるものとする。文化遺産と地域をあわせてまもるという考え方においては、地域の核として認識されている文化遺産であれば、それは世界遺産、国宝などに限定する必要はないと考えられる。そこで、本あり方において対象とする文化遺産は、世界遺産、国宝、重要文化財等の指定されたものだけでなく、未指定の文化遺産も含め地域の核となるようなものとする（2004年7月、内閣府の「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」）

- 文化財という用語を用いる場合、それが国や地方公共団体により指定などをうけ、保護の措置が図られているものを指すものとしてとらえられがちである。そのため、そうした指定文化財を含む、歴史的な価値を持つ文化的所産を指すものとして、文化遺産という文言が用いられていることが多い。しかし、文化財保護法に規定されている本来の文化財とは、指定などの措置がとられているか否かにかかわらず、歴史上又は芸術上などの価値が高い、あるいは人々の生活の理解のために必要なすべての文化的所産を指すものである。（平成19年10月30日 文化審議会文化財分科会企画調査会報告書）

3 多発する地震と水害 1995

- 2000年10月6日 鳥取県西部地震
- 2001年3月24日 芸予地震
- 2003年5月26日 宮城県北部連続地震
- 2004年7月12日 新潟・福島豪雨 7月14日 福井豪雨
- 2004年10月19日 豊岡豪雨
- 2004年10月23日 新潟県中越地震
- 2005年3月20日 福岡県西方沖地震
- 2007年3月25日 能登半島地震
- 2007年7月16日 新潟県中越沖地震
- 2008年6月14日 岩手・宮城内陸地震
- 2009年8月9日 佐用町豪雨
- 2011年3月11日 東日本大震災

4 史料ネットの活動から

- 第1期 1995年2月～4月 地域の記憶を未来につなぐ
歴史資料保全情報ネットワークの成立 歴史関係団体の関係強化
- 第2期 1995年4月～1996年3月 地域とともに
巡回調査、市民講座、震災資料への取り組み等開始
- 第3期 1996年4月～2002年5月
歴史資料ネットワークと改称、目的活動の明確化
- 第4期 2002年5月～2004年6月
市民と歴史学会による組織 個人会員、サポーター制導入
- 第5期 2004年6月～2007年ごろ
大規模水害時の保全活動開始、事務局長等の中心メンバー世代交代
- 第6期 2008年～現在 地域歴史文化の危機の進行



第1期の活動 倒壊家屋からの資料保全



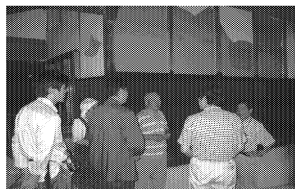
第2期の活動 地域の研究者との巡回調査



←宝塚市での古文書教室→「宝塚古文書を読む会」として現在につながる



2004年秋の大水害での学生による水損史料の保全活動



←2003年宮城県北部連続地震の際の被災調査と保全活動

5 地域の記憶の継承の困難

- 「モダン」な都市 神戸 ?
地域の歴史のある部分だけが切り取られる。
過去→現在→未来のつながりが貧困
多様で重層的な地域のイメージの一元化
- 歴史資料についてのイメージの違い
教科書には地域の歴史はない 江戸時代の村数は？

※コミュニティ存続危機 高齢化、過疎、文化継承(60年代)

近代日本の町村合併

- 近世(江戸時代末)の町村 8万余
※多様な身分団体(「仲間」)
- 1889年市制町村制実施 15,859
※旧町村は部落・区へ
- 1953年からの大合併 3,472
※旧町村支所等に
- 平成大合併 2000を切る
※県内では郡レベルの市・町
尼崎市 尼崎町、小田村、大庄、立花、武庫、園田

多様な町村合併 吹田市を事例に

1889町村制
山田(上・中・下・小川・別所) 5000石弱 →山田
佐井谷村 1118石 片山村 1193石 →千里
岸部村(南・東・七尾・小路・吉志部) 3000石余 →岸部
吹田村(東組・中組・西組) 3342石 →吹田
垂水村 1071石 榎坂村 1168石 →豊津
下新田村 283石 →新田(上新田村とともに)
山田・岸部・吹田 郷 下新田 近世開発村
淀藩大庄屋 14カ村
吹田村の大きさ『吹田市史』第2巻 今後の課題

6 記憶を伝える市民の力量増大

- 阪神淡路大震災を記録する
 - ・阪神淡路大震災記念人と防災未来センター(16万)
 - ・神戸大学附属図書館震災文庫(6万)
 - ・震災・まちのアーカイブなど市民レベルの運動
- 被災地での市民力(支援、協力、共同)
- 地域での新たな市民の動き
 - ・宝塚古文書を読む会 尼崎富松地区の取り組み
 - ・丹波棚原地区の地域歴史文化の取り組み etc.

7 自治体と市民と大学等の取り組み

- 尼崎市 中在家町並み絵図の復元etc
- 香寺町史の取り組み 人口2万弱
町民が自らが書く町史 240名の編集体制
- 小野市(人口5万)好古館の取り組み
地域展 主人公は、子供とお年寄り(お母さん)
→丹波市と地域連携センターの事業
- 三田市史資料編第5巻近代1
市民がつかえる市史

8 地域歴史遺産とは

- 地域歴史遺産とは、その地域の記憶をその地域において次の世代に引き継ぐ、地域にとってかけがえのないもの

※東日本大震災→がれきから記憶を集める

例) 地域自治会の記録

全国どこにいても存在、しかし記録された地域の出来事は、その記録にしか残されない。他のものと代え難いもの

8-2 地域歴史遺産の特質

①地域遺産は単に「ある」のではなく「なる」もの、地域の文化の継承とともに価値を増していく存在

②地域遺産は、地域社会への豊かな感性を育てるもの →地域自慢ではない

※歴史関係者の独自の役割

9 小野市を事例にして

- 前提 13年間の市史編纂事業1991-2004

※執筆すれば仕事は終わる

文学部地域連携センター設置 2002-3

小野市好古館(博物館)への事業引継

- 背景

阪神淡路大震災後の
歴史資料保全の組織的活動
(歴史資料ネットワーク)



方法の開発 ①「地域展」方式

- 「地域展」方式

区(近世村単位)を基礎として、地域の大人と子供がともに地域歴史遺産を学び、それを博物館で展示し、図録化する。

5月から準備開始、11月に地域展開催。

2002年、阿形村から



■ 市史の成果の利用 本文・整理史料・遺跡

■ 部落(近世村)の再「発見」 コミュニティ協議会
発信型の展示で、8000→15000に
※70年以上かかる

○大学の協力

■ 旧行政村を単位として2／3年で

■ 内容の充実 小中学校・地域外への展開

方法 ②地域と世界の往還
大学も担い手となった地域文化形成

■ 小野市での第一次世界大戦でのオーストリア人を中心とした俘虜収容所の研究、コンサートの復元の共同事業。

■ 2008年9月 ウィーンのオーストリア国家公文書館での里帰り展示会と神戸大学交響楽団による再現演奏会。

■ 歴史学・建築学・音楽
体育学 教職員・学生

オーストリア国家文書館での演奏風景



おわりに

■ 地域文化は地域社会の再生に必須
※地域社会の危機 文化領域

■ これを支持し、自ら活動する市民

■ そのためには地域文化関係者の共同した持続的・組織的活動が必要

■ 豊かな地域歴史文化なくして、災害文化の形成はない→緊急時の地域歴史遺産保全